

## 放射線とつきあう時代を生きる あってはならない、なくてはならない放射線

岩崎民子 著



東日本大震災(3.11)で歴史は変わった。

巨大地震、続く大津波で、東京電力(株)福島第一原発の原子炉は制御不能に陥り、日本史上、未曾有の原子力災害をもたらした。大津波の可能性は、以前から指摘されていた。対策をとってこな

かった東電には、原子炉の安全性に対する過信・慢心があり、事故となった場合の被害の甚大さに対する想像力が不足していたのではないか。“想定外”では済まされない事態を引き起こしたことは事実である。

そして、“安全・安心”という言葉に対する“信頼”がなくなった。

我々は、否が応でも、放射線・放射能とともに生きる必要がある。私自身、専門家の片割れとして3.11以前から、年に数回、高校生や市民を対象としたセミナーで、霧箱実験などを通して身近にある放射線を実感してもらい、講義を通してその便益とリスクを説明してきた。しかし、3.11以降、“原発事故”に言及し、食の安心・安全の話を織り込む必要に迫られた。不安を感じる生徒や先生・お母さん方に聞いてもらえる話をする必要がある。巷に溢れる有象無象の情報の中で、いかに、信頼できる情報を提供できるか。

ひところ、書店の店頭には、原発事故に関する書籍が山積みされていた。どれを信じて良いのか、何を参考にすれば良いのか、戸惑うばかりである。生半可な知識では、聞いてもらえない。そんな時に、

この本に出会った。

本書は、放射線の利用から始まり、その性質をできるだけ簡潔に述べ、さらに放射線事故例を取り上げ、放射線からどのように身を守るかで終わる読み物として書かれている。とりわけ、放射線の光と影、両面を言及されている点に説得力がある。読者対象として、新たに始まった“放射線を含むエネルギー教育”を担当する小学・中学・高校の先生を想定されているが、地域の人たちに放射線の話をしなくてはならなくなった“専門家”にとっても良い参考書であり、また、放射線のことを少しでも知りたいという方々にとって、格好の入門書である。

本書で印象に残ったのは、放射線の量を実感してもらうために“邪道(著者曰く)”ではあるが、あえて“1 mSv=1円”と例えていることである。どのように例えているかは、本書を読んで味わって欲しい。放射線の単位は、一般の方々には分かりづらい複雑であるため、“分かりやすく”説明することは至難の業である。

放射線は目に見えない、五感に感じない、それゆえ恐れられる。しかし、本書で述べられているとおり、3.11以降、簡易測定器が普及し、目で見て数値を確認でき、その値に一喜一憂する方もいる。その値にどのような意味があるのか理解している方がどれほどいるだろうか。必要以上に恐れたり、または、その値が一人歩きをして風評被害を招くこと、あるいは被災者に対する差別や偏見を助長し、被災地の復興の阻害や人権侵害にまで発展することのないように気をつける必要がある。

福島原発事故の収束には、長い年月が必要である。地域を復興し、元気を取り戻すためにも、本書を通じて“放射線とつきあう時代を生きる”力を身につけて欲しい。

(緒方良至 名古屋大学大学院医学系研究科)【投稿】

(ISBN-13: 978-4621086049, B5判 188頁, 定価本体 1,800円, 丸善出版, ☎03-3512-3267, 2013年)